

コーカサスの秃鷹

豊島与志雄

青空文庫

コーカサスに、一匹の大きな禿鷹はげたかがいました。仲間の者達と一緒に、高い山の頂いただきに住んで、小鳥を取って食べたり、麓ふもとの方へ下りてきて、死んだ獣けものの肉をあさったりしていました。ある時ふと、ひよんな考えを起こしました。

「自分は仲間の誰よりも、体が大きく、力が強く、知恵もあるの
で、みんなから尊敬すまいされている。そこで一つ奮発ふんぱつして、みんな
よりも立派な住居すまいをこしらえて、王様ぜん然と構かまえこんでいなくちや
なるまい」

そして彼はいろいろ考えた末、国中の一番高い山の頂に、立派な岩屋を探して、そこに住居を定めようと思いました。

ところがいよいよとなると、どれが国中で一番高い山か、さらに見当がつきませんでした。一番高そうな山の上に立って、四方を見渡しますと、向こうの山の方がもっと高そうに思われますし、その山の上へ飛んでゆくと、また向こうにもっと高そうな山が見えます。そしてあちらこちらと、山から山へ飛び移ってるうちに、体が疲れてくるし、気持ちはいらいらしてくるし、どれが一番高い山だかさっぱりわからなくなりました。

「こんなじゃとてもわかりつこない。誰かに聞かなくちや駄目だ。そこで、秃鷹はげたかのことなら俺達おれたち秃鷹が一番よく知ってるし、山

のことなら山自身が一番よく知ってるはずだから……」

そう思いついて彼は、ある山のうえに飛んでいって、大きな岩の上にとまって、山の霊れいにたずねてみました。

「もしもし、ちよつとおたずねしますが、国中で一番高い山はどの山でしょうか」

すると、岩の中の方から大きな声がしました。

「俺だ」

禿鷹はびっくりしました。これが国中で一番高い山だったのかしら、と思つてあたりを見渡しますと、どうも向こうの山の方が高そうな気がします。それでなおも一つの山の霊に聞いてみたくなつて、向こうの山へ飛んでゆきました。

「もしもし、国中で一番高い山はどの山でしょうか」

すると、その山の霊が岩の中から答えました。

「俺だ」

秃鷹はまたびっくりしました。そして、も一つ他の山にたずねてみようと思つて、その方へ飛んでゆきました。

「もしもし、国中で一番高い山はどの山でしょうか」

「俺だ^{おれ}」

そこで秃鷹^{はげたか}はなお迷いました。そして方々の山へ行つてはたずねましたが、どの山もみな国中で一番高いのは俺だといひのです。

さあ秃鷹は困つてしまいました。山自身に聞いてもわからない

とすれば……。その時ふと彼は、山の神のことを思いつきました。国中の山の靈れいを支配してる山の神に聞けば、きっとわかるにちがいない。「だが……まてよ」と禿鷹は考えました。「国中で一番高い山に巣を作りたいなどと、明あからさまに言えば、山の神は俺を生意気だと思つて、教えてくれないかも知れない。これは一つだまかして聞く方がよさそうだ」

彼は一人うなずいてから、山間さんかんの森の中に山の神を訪おとずれました。

「いつも御機嫌よろしゆうて、結構でございます」

禿鷹が丁寧ていねいに御辞儀おじぎをするのに、山の神は大様おうようにうなずいてみせました。

「うむ　そしてお前のような者がわしの所へ来たのは、何の用か」
「はい、私共は山の上に住んでおりますので、山については何一つ知らないことはありません。がただ一つ、国中でどれが一番高い山だか、それがわからないで困っております。私共にとつては、山は言わば自分の家でありまして、国中で一番高い山は、自分の家の一番貴い所とうとでありますから、汚さないように大事にしたいと思っておりますが、さてどれが一番高い山だかわからないのです。山の靈に聞いたらわかるかと思つて、一々たずねて廻りましたが、どの山の靈もひどくいばりやで、みんな自分が一番高い山だと申します。それで……」

「ああそのことで来たのか」と山の神は言いました。「山の靈達れい

はみなそんなにいばっているのか。よろしい、わしがよく言いきかしておいてやる」

「はい、どうぞお願いいたします。そして……」

「いやもうよい。山の霊達にはすぐわしが言いきかしてやるから
禿鷹^{はげたか}は初め、山の神から一番高い山を聞き出すつもりでしたが、話がそんなふうになって、とうとう聞きそびれてしまいました。けれども、山の霊達がいばりさえしなければ、山の霊達から聞き出せるにちがいない、と禿鷹は考えて帰ってゆきました。

翌日になると、秃鷹は高い山の上へ飛んで行って、その山の霊にたずねました。

「もしもし、国中で一番高い山はどれですか」

岩の中から山の霊が答えました。

「向こうのだ」

秃鷹は向こうの山に飛んでゆきました。

「もしもし、国中で一番高い山はどれですか」

「向こうのだ」

秃鷹は向こうの山に飛んでゆきました。しかしその山の霊も一番高い山は向こうのだと答えます。そんなふうにして、秃鷹はげたかはまた方々飛び廻りましたが、どれ一つ自分が一番高いと言う山は

ありませんでした。

「これは困った。山の神に言われたとみえて、どの山もへりくだってばかりいて、向こうのだ。向こうのだ……と言うんじやあ、いくら聞いてもわかりっこない。そうだ、も一度山の神の所に行つてみよう」

そこで禿鷹は、山の神の所へ飛んで行きました。

「昨日はありがとうございました。おかげで山の靈^{れい}達は少しもいばらなくなりました。けれど困ったことには、みんなへりくだつてばかりいて、どれが一番高い山ですかと聞いても、向こうのだ、向こうのだと答えるきりです。それでどうか、も一度お骨折^{ほねお}り下すつて、いばりもしなければへりくだりもしないように、よく言

いきかして下さいませんか。そうでなければ、どれが一番高いんだか、私共は聞き出すことが出来ませんから」

「よろしい」と山の神は言いました。「お前の言う通りに言いかしておいてやろう。どの山が一番高いか、わしから教えてやってもよいが、今まで山の霊達にたずねたのだから、やはり山の霊達に聞くがよい。山の霊達には、お前の望み通りわしが言いかしておいてやる」

「どうぞお願いします」

そして禿鷹は喜んで帰ってゆきました。

さて翌日になると禿鷹はげたかは、こんどこそは大丈夫だと思つて、
威勢いせいよく、飛んでゆきました。

「もしもし、国中で一番高い山はどれですか」

するとその山の靈れいは、いばりもしなければへりくだりもしない
で、岩の中から冷ひやかに答えました。

「どれだか知らない」

禿鷹あては当がはずれました。それでもなお、方々の山へ行つて、
一々たずねてみましたがどの山の靈もみな、どれだか知らない、
と同じ冷かな答えをするきりです。

そうなると禿鷹も、山の靈達から聞き出すことはあきらめるほ

かはありません。それかつて、山の神へまた何とか頼みに行くのもしやくです。はて何かよい工夫くふうはあるまいかと、一晩中考えた末、思いついたのは雷らいの神のことでした。

「雷らいの神なら一番高い山を知っているはずだ。がただ聞いたんでは、俺おれの受持ちじゃないと言つて教えてくれないかも知れない。これは一つ、雷らいの神の氣短きみじかなのにつけこんで、工夫をめぐらすに限る」

四

禿鷹は翌日、思案しあんを定めて、雷の神の岩屋へやつて行きました。

「今日はよいお天気のようにですが、お休みになるのですか」

「そんなことを聞いてどうするのだ」と雷らいの神は破鐘われがねのような声で言いました。

「いえ、どうもいたしません。いつもあなたが低い所でばかり雷を鳴らしていらつしやるので、お疲れになったのじゃないかとおもいました、へへへ」と禿鷹はげたかは変な笑い方をしました。

「何だ、低い所でばかり雷を鳴らしてるから疲れる……」

「私共から見ますと、あなたが低い平地の上にはかり雷を鳴らしていらつしやるのが、意気地いくじないような、おかしいような気がします。私共のような鳥でさえ、高い山の上を飛び廻つてるのですもの、あなたも一つ奮ふんぱつ発して、国中で一番高い山の上に雷を落

としてみられたら、いかがなものでしょう。それともあなたは、そんなに高い所へは昇れないとおっしゃるのですか」

気の短い雷の神は、それを聞いてもうむかつ腹を立てて、いきなり立ち上がりました。

「よし、それではこれから、国中で一番高い山の上に、大空の上から雷を落としてみせるぞ」

「それは結構でございますな。つつし謹んではいけん拝見いたしましょう」

雷の神がうまくさくりやく策略にのつたので、秃鷹はしめたと思つて

ほほえ微笑みました。雷が落ちるのを見定めれば、どれが一番高い山だ

かすぐにわかるし、またそれで、今まで嘘をついた山の霊を、罰するわけにもなるのです。

五

そこで秃鷹はげたかは、ある高い山の上に飛び上がって、その頂いただきの岩の影から、四方を隈くまなくうかがい始めました。

谷間から遠く低く平地へかけて、ぼーっともやがかかっている、その間から方々に、高い山の頂がそびえ立って、きらきらと日に照らされています。

するうちに、いつのまにか、日の光が隠れてしまつて、今まで低い麓ふもとの方にしか出たことのないまつ黒な夕立雲が、驚くほど高く空の上に出てきて、むくむくとふくれ広がってきました。

「雷らいの神がいよいよやり始めたな」

そう思つて秃鷹はげたかは、眼を皿のように見開いてうかがつていました。

夕立雲はますます大きく濃くなつて、見る見る内に空を隠してゆき大粒の雨がぽつりぽつり落ちてきて、天地がまっ暗な闇に包まれてしまいました。

「さあもうじきだぞ」

そして秃鷹はさらに眼を見張りましたが、岩の影からではよく見えないので、その山の頂の一番高い岩の上に飛び上がつて、雨に濡れながら一生懸命になつて、どこに雷が落ちるかを見張りました。

雨はもう大降りになり、天地はなお一層暗くものすごくなり、高い雲の中には雷が鳴り始めました。と思うまに、ぴかつと矢のような光がつつ走って 同時に天地もくずるばかりの音がして……とまでは覚えていましたが、それきり禿鷹はげたかはあつというまもなく、息が絶えてしまいました。

禿鷹が上つていた山こそ国中で一番高い山で、そこに雷らいの神が雷を落としたものですから、頂上の岩の上くろこにいた禿鷹は、それに打たれて、黒焦げくろこになつて死んでしまったのです。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

コーカサスの禿鷹

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>